

中国における「支那游記」の翻訳

孟 一 霏

はじめに

芥川龍之介作品は、現在50近くの国や地域で翻訳出版されている。中国では、1921年に魯迅訳の「鼻」と「羅生門」が出版されて以来、数多くの作品が翻訳されてきた。中国語訳の豊富さは目を見張るものがあり、小説のみならず、評論、散文、書簡にまで及ぶ。

しかし、一つの作品が初出後すぐ翻訳されたあと、長い間に誰も問いたさない異色を持っている、これは芥川の中国旅行を記した『支那游記』である。

1921年3月から7月にかけて、芥川は大阪毎日新聞の海外視察員として中国各地を旅行した。帰国後すぐに、『大阪毎日新聞』に「上海游記」と「江南游記」を連載し、『女性』(1924.9)にタイトル「長江」、『改造』(1925.6)に「北京日記抄」を発表した。その後1925年11月に改造社から単行本『支那游記』にまとめて出版された。この作品には半封建半植民地の中国社会に対する芥川の失望、諷刺といった差別的な表現が多く見られたため、同時代の中国知識人に大きく評論された。

本稿は「支那游記」の三つの翻訳バージョンを検討しながら、『支那游記』が日中文学の中にもどのように位置付けられたかを明確にすることを試みるものである。そこには、芥川文学の評価がどのように変化したかを明らかにすることによって、芥川文学の多様性がより鮮明に浮上してくる。

一 夏丐尊訳『中国游記』

1926年4月号の『小説月報』¹において『支那游記』は「芥川龍之介氏の中国観」という題で翻訳され、掲載された。これは『支那游記』の最初の中国語訳であり、その後『中国游記』と改題されて『芥川龍之介集』(開明書店 1927年)に収録された。

翻訳者の夏丐尊(1886年～1946年)は本名が夏鑄、浙江省上虞県で生まれ、教育家、文学家である。1905年に日本に留学。宏文学院、東京高等工業学校で学ぶが、経済的な理由で学業を止めざるを得なかった。1907年に帰国し、浙江省各地の師範学校や中学校で教鞭を執る。五四運動の頃、経亨頤、陳望道、劉大白とともに、「浙江四傑」と呼ばれ、「新文化運動」を積極的に推し進める。その後、寧波各地で教員を経て、1926年に復旦大学中文系に勤めながら、上海暨南大学の中国文学系主任になる。1927年から、上海の開明書店編集所長に任じられる。1937年日本軍の侵略で上海が大混乱に陥ったため、教職を辞し、開明書店の職だけ残し、著書や訳書に没頭する。1946年4月23日に上海で逝去。そ

1 『小説月報』は1910年7月に上海で創刊、商務印書館発行の旧小説の月刊雑誌であったが、1921年に「人生のための芸術」を目的とする文学研究会の機関誌に改組された。

の後、重慶の『新華日報』によって「民主戦線の老戦士」と高く評価される。

『小説月報』に掲載された際に付けた「一九二五、一二、訳者記」からわかるように、夏丏尊は内山書店を經由し、1925年11月に日本で出版された『支那游記』を入手して、原作の刊行から僅か1ヶ月あまりで、すでに中国語に訳了した。彼は『支那游記』における芥川の「諷刺」を見出したが、芥川の描写を「人家並不曾妄加故意的誇張」（「故意に誇張を妄りに加えていない」）ものとして客観的な評価を下し、芥川の中国観に「我也無法為自国争辯」（「自分の国を弁護する方法がない」）ほど共感を持っている。

夏丏尊のように芥川と『支那游記』に客観的で肯定的な評価を下し、冷静に当時中国社会の問題を直視した中国知識人がいる一方に、『支那游記』を読んで非難する知識人もいる。掲載されると張若谷や閻葆明の反感を招いたが、30年代以降に丁丁や巴金たちも批判した。例えば、巴金は1935年1月号の『太白』で「几段不恭敬的話」（「いささか苦言を呈する」）を発表し、『支那游記』を含めて芥川の全作品に対して、「私は反感を抱かざるを得ない」といい、「形式以外に彼の作品にいかなる内容があると言えるのか？ 私は空虚の二文字でもって彼の前作品を批評したいが、それは不適當というわけではなかろう。この五百頁あまりの分厚い芥川文集の中で、ほんの一、二編をのぞいて、読んだ後二度と読む必要を感じられぬ作品しかない。」と芥川文学の価値を貶めた。

肯定と否定両方の受け止め方の間にある落差は、当時日中両国に緊迫していた社会状況とかわると考えられる。当時中国全国に反日気運が高まりつつあり、知識人たちにも日本帝国を批判し、愛国を提唱する文章を盛んに書いていた。その一方、夏丏尊の訳文自体も一つの理由だと思われる。当時からその翻訳について、批判する声もあり、それは、中国で最初に芥川を紹介した、魯迅である。1926年4月17日の日記で、魯迅は『支那游記』を購入したと記録したが、この本に関する読書感想や評論などを残していない。増田渉²の回想では、魯迅いなくなる1936年10月の三ヶ月前に、魯迅が芥川の晩年のものを中国で紹介しようと思うと言い、「芥川は游記を書いて中国の悪口を云つたので、中国では評判が悪かった。しかしそれは紹介者（翻訳者）のやり方がよくない、いきなりあんなものを紹介すべきではないのだ」と述べている。芥川文学を理解していた魯迅が、夏丏尊の翻訳に問題が存在すると判断して、少なくとも夏丏尊の翻訳意図が当時の中国の先進知識人に理解されなかったことが読み取れよう。

1921年魯迅訳「鼻」が掲載されて以来、芥川は「日本の新興文壇の中でも評判作家」として、彼の小説の多くは中国語に翻訳されたが、彼の散文・遊記が訳されたのは夏丏尊訳『中国游記』が最初である。夏丏尊は芥川の「諷刺」を事実通りのものと受け止めたにとどまらずに、「彼の観察を鏡として」国民に紹介しようとする翻訳意図・目的で、「特に紹介してみたい一部分」を訳した。つまり、訳出された部分は彼の考えたもっとも国民の自己省察に「鏡」的役割を果たすものである。抄訳されたのは『上海游記』の「第一瞥」「城内」「舞台」「章炳麟」「鄭孝胥」「南国美人」、『江南游記』の「車中」「西湖」「蘇州城内」「南京」、『長江游記』の「蕪湖」、『北京日記抄』の「雍和宮」「辜鴻銘」「十刹海」である。芥川の辛辣な「悪口」を記述した観光体験、文人会見記、芝居見物などが含まれているが、翻訳の分量が原作の三分の一にすぎず、かなり省略が為されているということが一見して判断できる。翻訳の文体的には、夏丏尊訳では、1919年の新文化運動以来普及された白話文で、しかも出来る限り

2 増田渉「巴金の日本文学観」『魯迅の印象』講談社、1948年

日本語の語順に変化が生じないような直訳の翻訳文体が使われている。または、日本語が片仮名で表す言葉には、その読みの英語表記を施している。夏巧尊の翻訳は優れた文章であり、現代の読者に読ませてもわかりやすいものであり、芥川の当時の意思への理解にも問題がないとは言えない。

そして、翻訳の部分の選択には、翻訳者自身の意思も含まれて、芥川文学の全貌を紹介するより、特定な部分だけ読者に読ませていることによって、芥川の意図を全体に伝わっていないと考えている。例えば、原作の『上海遊記』では問答体、書簡体、メモ風の文語体、戯曲体など多様な文体が使い分けられている。しかし、夏巧尊訳『中国遊記』ではこれらの部分は省略された。このように、夏巧尊が芥川の「諷刺」に注目しすぎて、原作の文体上の特性を見逃してしまったと思われる。

二 『芥川龍之介全集』中国語訳と陳生保訳『中国遊記』

1937年から1945年の八年にわたる日中戦争の期間に、中国で日本文学の翻訳がかつてない低落期に入る。その後国内戦争を経て、中華人民共和国の成立した1949年から1966年まで、プロレタリア文学が翻訳の主流となるが、芥川をはじめとする日本文学で重要な作家は無視される。1967年から1977年まで文化大革命で日本文学の翻訳及び刊行はほとんど中断される。1980年に入ると、文化大革命による十年あたりの停滞期を乗り越え、政治の安定、経済の発展、出版界の盛況に伴って、中国における日本文学の翻訳も急速に発展し、盛んに行われるようになる。

四十年に近い空白を経て、芥川が再び中国で紹介されたのは八〇年代以降であった。『芥川龍之介小説十一篇』を翻訳した楼適夷が芥川を、「優れた才能と豊かな学力を持ち、思想が深奥で、気品が高邁であり、文筆が澄み切って、芸術への研鑽において頗る本領を見せた作家」であるとして紹介した。そしてもう一人の芥川翻訳者文潔若は、「彼のすべての作品は、題材や内容そして発想などの面でそれぞれに特徴があり、それは彼が創作において心血を注ぎ、芸術探求を怠らなかった結果である」と芥川文学を高く評価している。文潔若の序言の他に、同じく八十年代初頭のものとして、劉春英「不安の文学——芥川龍之介創作の歩み」、張中元「短命な鬼才 不朽なる作品——芥川龍之介に関する紹介と論評」なども、芥川作品を詳しく紹介し、その創作の特徴を論じている。1980年から1999年にかけて出版された芥川作品集には、小説のみならず、散文もある。全体として王朝物に集中している傾向が見られ、定評のある「羅生門」「鼻」「藪の中」もよく収録されている。しかし、1926年以来、『支那遊記』を翻訳・収録された作品集が一冊も出版されず、『支那遊記』の中国語訳がいまだに夏巧尊訳『中国遊記』しかない点が挙げられる。『支那遊記』は長い間に中国で冷遇・軽視されたといってもよからう。

1997年以来、中国出版界は活性化し、それに伴って各種の芥川作品集が爆発的に出版されている。特別に造本した豪華版、普及版なども入れると合わせて九種類、累積発行部数は7万冊以上と推定される。2005年3月、日本国際交流基金の翻訳助成と、15人の翻訳者の努力で、中国初の『芥川龍之介全集』全五巻が山東文芸出版社によって刊行された。中国では夏目漱石もよく読まれるとは言うものの、全集はいまだ出していない。中国語訳『芥川龍之介全集』は、小説や随筆だけでなく、詩歌や書評・劇評・書簡・遺書、それに年譜までも添えた本格的全集といえよう。今まで日本の作家の全集が翻訳されたのは、芥川が最初である。各巻平均800ページの堂々たる全集の第一巻で、編集者の高慧勤は「前言」で芥川文学を次のように評価している。

而芥川龙之介，着意于吸纳西方现代小说的方法，将虚构的方式重新引入文学的创作之中，开创了一种崭新的文风。它不是以日本独有的话语方式写作，而是采用世界都能理解的手法构筑他的小说。

(中略)

芥川的生命固然短暂，但作为作家的艺术生命却长存于天地间。其最佳作品，凝结着他的博学与才情，显示出一种东方的特色，东方的智慧，早已超越国界，成为人类精神文明宝库中的财富。即便忝列世界短篇名家之间，也毫不逊色！

(芥川龍之介とは、西洋の現代小説の方法の吸収に尽力して、虚構という方法を文学創作にとり入れ、新たな作風を作り出した。これは日本特有の物語の方法で書くことではなく、世界中で誰でも理解できる手法で自分の小説を構築している。

(中略)

芥川が生命が短い、作家としての芸術命が長く世の中に存在している。その最高傑作は、彼の博学と才能、ある的生の特色と知恵を現わし、国境を越えて、人類の精神文明の宝になる。世界の短編の名家に並べても、いささかの遜色もない。)

全集の第一、二巻はほぼすべての小説を収録し、第三巻は散文、詩歌、遊記を、第四巻は評論を、そして第五巻は書簡、遺書、年譜を収める。陳生保訳の『中国遊記』は第三巻の中に取り上げられている。夏丐尊の抄訳と異なって、これは中国で最初の『支那遊記』の全訳である。

『芥川龍之介全集』の刊行後2006年1月、陳生保と張青平訳の単行本『中国遊記』が北京十月文芸出版社の「大家小書」シリーズの一巻として刊行された。「国境を越えて、視線を世界に向ける」ために、この「洋経典」シリーズにはマルク・シャガール(フランス)『わが生涯』、ファン・ラモン・ヒメネス(スペイン)『プラレーロと私』、アンネ・フランク(ドイツ)『アンネの日記』、D・H・ロレンス(イギリス)『本・絵・人』、アントワヌ・ド・サン＝テグジュペリ(フランス)『星の王子さま』といった大物作家、芸術家の作品が収録されている。このように、芥川の『支那遊記』がこのシリーズに収録されたことは、芥川を世界の「大物作家」と位置付けて評価することを意味していると思われる。

陳生保・張青平訳『中国遊記』の巻頭で、陳生保の「芥川龍之介《中国遊記》導読」が載せられている。この序文において陳生保は芥川の『支那遊記』を横光利一の『上海』と並んで、中日比較研究の必読書として高く評価して、更に以下のように述べている。

自芥川的《中国遊記》刊行以来，时间已过去了八十年，芥川当初曾大失所望的中国，也发生了天翻地覆的变化，正值“汉唐以来所未曾有过的盛事”的我们中国和中国人，理应有更宽阔的心怀，更大的度量，来倾听一位从小憧憬中国文化，而对当时颓败破落的中国不满的异国作家出自真诚的抱怨。作为译者，我对芥川的这部书，是抱着基本肯定的态度的。

(芥川の『支那遊記』刊行されて以来、もう八十年がすでに過ぎました。当時芥川が大変失望された中国も、天地を覆るように変化した。ちょうど「漢唐以来かつてなかった繁栄」の時代における中国

とわれわれ中国人、もっと広い心、もっと大きい器を持つはずである。この子どもから中国文化に憧れの異国の作家が、当時破壊した中国に真心をこめた批判に耳を傾けるべきである。訳者として筆者が、芥川のこの作品にたいして、基本的に肯定の態度を取っている。）

陳生保は芥川の記述を「真心を込めた批判」として、「基本的に肯定の態度」を主張して、『支那遊記』を貴重な歴史的文献として評価している。芥川の中国旅行の社会・時代背景、テキストなどを分析することによって、作品の中に皮肉な描写の裏にある、中国に対する芥川のア、同情、及び日本帝国主義に対する芥川の反発を読み取る。そして、芥川の中国古典の知識、京劇に関する見解を認め、当時日本人の中国旅行記として、『支那遊記』の可読性を肯定している。

その一方、中国人の「排日」「反日」に対する議論、秦檜に関する議論、『水滸』に関する論議、中国小説に関する芥川の議論など部分を列挙している。芥川の中国の認識内容を賛成しがたいと論じている。このように「芥川龍之介《中国遊記》導読」は単なる作者、作品の紹介文だけではなく、『支那遊記』の内容分析まで行われて、読者に芥川の全体の中国観まで紹介する意図も見られる。

翻訳の内容的には、単行本『中国遊記』は原作に忠実に逐語的に訳し上げたものであり、『芥川龍之介全集』に収録された陳生保訳『中国遊記』とほとんど変わっていない。単行本の最も顕著な特徴といえば、添付された12枚の1920年代中国各地の風景、名所、旧跡なのであること。そして実際に芥川と会見した章炳麟、鄭孝胥、辜鴻銘の人物写真までもある。例えば、「北京日記抄」の「二 辜鴻銘」で掲載されている辜鴻銘との会見のほか、辜鴻銘の日本人の奥さんと当時8、9歳の娘さんのことも言及されているので、陳生保・張青平訳『中国遊記』で辜鴻銘と奥さん、娘さんとの写真も添加する。訳者が原作の内容を十分考えて、写真を選択したことを示唆している。

このように、陳生保、張青平訳『中国遊記』は原作に忠実な翻訳であり、更に芥川に見られた1920年代中国の歴史状況を読者のみの前に再現する工夫されたものとして評価できる。

三 秦剛訳『中国遊記』

2007年1月、中華書局の『近代日本人の中国遊記』シリーズの一冊として、秦剛訳の『中国遊記』が刊行された。『近代日本人の中国遊記』シリーズには、1870年代から1920年代まで中国を訪ねた日本の有名な作家、芸術家、政治家、ジャーナリストの書いた中国遊記を収録している。

秦剛訳『中国遊記』には『支那遊記』の本文のほか、エッセー「新芸術家の眼に映じた支那の印象」や、小説「南京の基督」「湖南の扇」の翻訳まで収録される。二篇の小説は近代中国を舞台とした物であり、芥川の中国現代物と中国旅行を関連させる編集意欲が読み取られる。従来、中国における「杜子春」を代表的な中国古典に題材を翻訳・研究するより、「芥川と中国近代」という比較文学的領域を提示し、中国における芥川文学研究の新たな展開を促すものともいえよう。

「芥川龍之介の中国旅行与《中国遊記》（訳者序）」では、秦剛は『支那遊記』を大正時代の文学者の書かれた最も重要な中国紀行と称賛しながら、更に次のように指摘している。

同时需要强调的是，这部《中国遊記》不是职业记者撰写的专业性中国报道或中国考察，而是一部出自一个29岁的青年文学之手的旅游纪行，是作者通过他独到的小说家的视角记录与捕捉的1921年的中国。这应该也是这部遊記一个独特之处与价值所在。

同時に、強調しなければならないのは、この『支那遊記』がプロの記者によって書かれた専門的な中国報道、中国考察でない点である。これは二十九歳の青年文学者が書いた旅行紀行であり、作者は彼の独特な小説家としての視点を通して一九二一年の中国を記録して捉えたのである。この点はこの遊記の独特な価値である。

前述した夏丏尊は、芥川の「観察と描写は、言うまでもなく全て文芸作家の目からのもので、他の考察団、観光団のような実業的あるいは政治的な観点と違う」と評価している。秦剛は『支那遊記』を明治、大正年代の記者、政治家、中国通などの中国遊記と区別して「小説家の紀行文」と位置付けて、文学者によって書かれた文学作品として評価している。夏丏尊と同じく文学者である芥川の特徴を取られて、作品の翻訳作業を行なわれている。時代が異なる二人の翻訳者が同じ特性を認めて、翻訳の共通性ともいえる。

秦剛訳『中国遊記』は、同じように原文に忠実な逐語訳を行い、実証的な研究によって、原作で言及された日本作家、中国の古代文学者、西洋の作家、及び日本の独特な文化事象について、詳しい脚注を付けて説明する。また、翻訳の意図、目的を紹介した序文も付けている。序文において作家紹介のほかに、翻訳者たちは芥川の中国旅行の動機、当時の日本と中国の社会・歴史状況を客観的に分析している。序文の中では、一九二〇、三〇年代における中国の社会状況の変化を十分意識し、当時の中国日本両国の知識や情報を読者に提供して、『支那遊記』を貴重な「歴史的価値」ある文献として肯定的に評価している。

そして秦剛訳の特色を見てみよう。翻訳者の秦剛が芥川文学研究の専門家であるため、訳した『中国遊記』の特色は主に以下の二点が挙げられる。まず、芥川の中国旅行に関する紹介である。秦剛訳『中国遊記』には当時芥川が旅行で撮った写真が掲載されている。これらの写真は、日本近代文学館で所蔵されている芥川の写真資料の中から選び出し、日本近代文学館の許可を得たものである。

秦剛訳『中国遊記』のもう一つの特色は、原作における誤記の訂正、岩波版『芥川龍之介全集』の注釈の補充である。秦剛の翻訳は岩波書店一九九五年版『芥川龍之介全集』を底本としているが、さらに初出の原文と岩波版の全集を比較・対照することによって、訂正作業も行われている。その一例を紹介しよう。「上海遊記」の「十 戯台(下)」で書かれた京劇俳優の芸名に関して、初出の「大阪毎日新聞」で「白牡丹」(本名：荀慧生)、岩波版全集で「緑牡丹」(本名：黄玉麟)となっている。秦剛は、芥川が中国旅行した当時の1921年4月上海の新聞や芥川と同時代の京劇研究者の著作を比較・考察し、「上海遊記」の訳文で脚注を付け加えて「白牡丹」と訂正した。このような訂正、考察を加えた脚注は秦剛訳『中国遊記』には多く見られる。従って、翻訳の正しさを保ちつつ、芥川文学研究者としての考察をも最大限に活用した秦剛訳『中国遊記』は、翻訳でありながら芥川文学研究に貢献する学術研究書でもあると評価できる。

終わりに

『支那遊記』刊行されてすぐ翻訳した夏丏尊には、序文で言うように「紹介が必要な部分が翻訳して」「この本から面白さは感じられないが、しかし日本では人気があり、中国に対して諷刺が多くみられる」、翻訳するとき、当時中国の社会問題には、自分の感情も含めると考える。翻訳した内容から見ると、人物談を全部選択して、そして中国に対する感想や意見の部分を殆ど保留されていること

によって、夏丏尊が読者に紹介したいのは、一人の作家である芥川ではなく、作家としての芥川の中国観であることが分かる。つまり、翻訳の前提は読者がすでに芥川龍之介について、ある程度了解していることである。そして、当時の社会状況によって、麻痺墮落の国民を喚起しようという意図がみうけられる。

陳生保・張青平が共訳した『中国遊記』は、はじめての全訳であり、単行本である。20年代の中国各地の写真などを収録し、それによって読者の興味を引き、作家芥川龍之介を読者に紹介したい意図が分かる。秦剛訳の『中国遊記』はまず序文で全面的に芥川文学を紹介し、そして原文による緊密な考察も行なわれている。当時の芥川が見た中国を再現すると同時に、『支那遊記』を芥川文学世界に入れて考える。二作とも叢書中の一巻であり、それぞれのシリーズによって翻訳の重点が異なる。

ここまで考察してきたように、中国における『支那遊記』の翻訳状況は当時中国社会の変化を映し出している。翻訳者がどのような現代の中国では、外国の作家や作品を紹介することどまらずに、研究者自らの限界も含まれ、比較文学的な考察や文学評価的な考察が展開されるようになっている。これからも、国境を越えた広い視野を持つ、中日文化・文学研究で大きな役割を果たすことが期待されている。

参考文献

1. 小説月報 第18巻7-9号 1927年第9号 鄭振鐸主編 北京：書目文獻出版社 1983.02
2. 中国遊記 陳生保・張青平 譯 北京出版社出版集團・北京十月文藝出版社 2006年
3. 中国遊記 秦剛譯 中華書局 2007年

Translation of “Chinese Travel” works in China

MENG YIFEI

In China, the novels of Ryunosuke Akutagawa attracted great attention at a very early time. It might start from the early translation of the “Nose”, “Rashomon Gate” by Lu Xun — Zhou Shuren and his brothers. In the beginning of the 1980s, the upsurge of literary translation of Sichuan was boomed. At that time, Akutagawa Ryunosuke can be said the most popular Japanese literary writers in China, who had the most translated works. However, the “Chinese Travel”, which described in 1921, over 100-day travel experiences and notes in China, was rarely translated. After the first translation by Xia Mianzun in 1922, this work that shows Akutagawa’s ability as a journalist has been forgotten for more than 80 years. Until 2005, the complete works of Ryunosuke were published, which made the Chinese Travels be translated and published again.

In this paper, the author analyzed the translation backgrounds and features of three versions of the “Chinese Travel” (i.e., the translation of Xia Mianzun in 1922, the translation of Chen Baosheng and Zhang Qingping in 2005 and the translation of Qin Gang in 2007), and attempted to find out the differences among the three translations. The situations of Akutagawa’s literary works being translated at different periods could represent the acceptance levels of Japanese literature at different periods in China, while research on the translation of Japanese literary works is of great significance on the study of culture and literature between Chinese and Japanese.